百目鬼少女の見る世界

帆乃女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
百目鬼少女の見る世界

【Ｎコード】
Ｎ３８８５Ｔ

【作者名】
帆乃女

【あらすじ】
ここの世界には神や悪魔、妖怪が存在するのだけれども日本政府はそれを隠し、一般庶民はその存在を知らない……
そんな中、私は超能力に目覚める。
日本政府には危険な超能力に目覚めた人間を暗殺する組織が存在する。
だから、私はあまり超能力を使いたくないのだけれど……
え？　お父さんがリストラされた！？　良家のお嬢様な母さんがパートなんて出来るわけないじゃない！！　それじゃあ、何！？　私

が稼ぐしかないじゃなか！！

こんな理由で私は危険を冒しながら超能力を使って稼ぎ続ける……

※もう一つの連載の息抜きにやってますので、更新は遅いです

プロローグ

「ねぇ、知ってる？“百目鬼さん”の噂」

「当たり前よ！知らない人なんていないいでしょ」

――――百目鬼さん――――

それが、今、私達の町で流行っている噂だ

‘都市伝説’と言っても過言では無いぐらい、有名になっている

“百目鬼さん”それは数年前に現れた‘何かを渡せば自分の欲しい情報を教えてくれる’という、いたってシンプルで怖くない噂

これだけでは、普通はそんなに有名にはならない

“百目鬼さん”を実際に見たという人が現れたのだ

その容姿は‘黒い影にたくさんの目玉が張り付いたもの’だそうだ

最初は‘そんなもの実在しない’という意見が多かったが、急速に“百目鬼さん”を見たと言う人が増え始め“百目鬼さん”を取り上げた都市伝説のテレビ番組が放送されたことをキッカケに、本当にいると多くの人間に信じられた

特に、取引相手の弱味を握りたい会社や嫌いな相手の弱味が知りたい等の理由で一部の会社、多くの学生に人気がある

――――深夜――――

「これで！この金でアイツの弱味が知りたいんだッ！出てきてくれよッ“百目鬼さん”よぉ！！！！」

とある山奥、男は大金を詰めたバックを肩に背負いそう叫んだ

男は中年ぐらいの外見で、髪はボサボサ、服もよくある黒いジャン

パーに藍色のジーパンを身に着けていた

男はネットにあった‘百目鬼さんは誰も居ないところでしか出てこない’という記事を鵜呑(うの)みにし、こんな山奥に来ていたのだ

山道を登(のぼ)ってきたため、服は汗だくで息も切れていた

「……ハァッ…ハァッ……出て、来いよぉ……ど…めき、さん……」

幾度(いくど)も叫び、声も嗄(か)れてきており男が諦めて帰ろうとしたとき、背中に悪寒(おかん)が走る

ザワッザザザザザザ

木が揺れ、大きな音を出す

「な、なんだぁ……風かぁ、ビックリさせんなよぉ……」

男は急に怖くなってきたのか、気弱そうに呟(つぶや)いた

ザワッザワッ　　ゴオォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！

「う、うわぁぁぁぁああぁぁあああああぁぁぁぁぁぁあ」

男は大声を上げ、両手で耳を塞ぎ、蹲った

そのときに、背負っていたバックが男の手から離れ、飛び上がった

「かっ、金ぇぇ！俺の金がぁぁ！！！」

男は気付き、手を伸ばすがバックは不自然に動き、暗闇へと消え去った

「畜生(ちくしょう)！畜生がぁ！なんだってこんな山奥まで来てやったのに！俺の全財産を返せよぉぉぉ！！！」

男は悪態(あくたい)を吐きながら下山していた

山の麓(ふもと)まで着き、車の鍵が入っているジーパンの後ろポケットに手を入れた

カサリ

車の鍵を取り出すとき、何かが一緒にポケットから落ちたのだ

「…俺……鍵以外に……なんか入れたっけ……」

男が拾うと、ソレは紙だった

『【坂本(さかもと)　厳太郎(げんたろう)　殿(どの)】

今回　は　坂本　殿　の　全財産　参千萬円(さんぜんまんえん)　↑　安い　を　戴(いただ)き

坂本　殿　の　欲しい　情報　を　書き記(しる)して　おきました

もっと　詳(くわ)しい　情報　が　欲しい　場合　は　もっと　大金　を

用意　する　ことですね

【坂本　殿　の　欲しい　情報】

妻　坂本　多恵子(たえこ)　の　不倫　相手　の　名前　住所　弱味　等々(などなど)

不倫　相手　名前　：　東弼(ひがしのり)　孝章(たかあき)

住所　：　追加料金　七拾萬円(ななじゅうまんえん)

弱味：汚いモノ（坂本 厳太郎 殿 も 含まれる）

以上

【百目鬼 より 坂本 厳太郎 殿 へ】『

「な、ななななななんなんだこの紙ぃぃぃ」

男は、厳太郎は困惑し、激怒した

入れたはずの無い紙がポケットに入っており、自分の妻の不倫相手の情報が書いてあり、差出人は“百目鬼”と名乗っている

それだけならまだしも、汚いものに自分が含まれているのだ

「し、しかもなんだぁ！？俺の全財産がや、安いだとぉ！？追加料金が七十万！？」

厳太郎は怒り、紙を破ろうとする

が、手を止めた

「もしこの情報が本当なのならぁ……多恵子を誑(たぶら)かしたのは……この東糊って男かぁ」

厳太郎はニヤリ、と薄汚い笑みを浮かべ車に乗り込む

車が発進し、誰も居なくなった場所に風が吹く

ザワッ　ザザザザザザザザァァァァァァァァァァァァァ

クスクスクス　アハッ　アッハハハハハハハハッ

その風に紛(まぎ)れた、歪(いびつ)な少女の甲高(かんだか)い笑い声を聞く者は誰もいない

プロローグ（後書き）

読んでくださってありがとうございます

誤字、脱字等ございましたら、感想にて教えてもらえると嬉しいです

日常が壊れた日～壱～（前書き）

2話目ですが説明多いです

日常が壊れた日～壱～

――――――――Ｓｉｄｅ　ＲＥＮＮ

朝、目が覚めた

体がだるい……原因は今日が月曜日だからだ

しかたなく体を起こし、ベットから這(は)い出る

私が朝一番にすること……それは、等身大の鏡の前に立って自分を眺めること

別にナルシストってわけじゃない

何かを眺めるのが好きなだけだ

テレビでも映画でも絵でも、風景でも空でも海でもなんでもいい

何かを眺めるのが好きなんだ

そうして何十分か経過する

不意に扉をノックする音が聞こえてきた

「恋起(れん)きてる？もう起きないと遅刻しちゃうんじゃないかしら」

お母さんが扉越しに言った

もうそんな時間か

私は中学校の制服に着替え、下(した)に下(お)りる

リビングのテーブルの上には食パンと目玉焼きと牛乳があった

私はイスに座り、それを頬張(ほおば)る

リビングは、静かだ

私以外に朝食を食べている人の姿は無かった

朝はいつもバラバラで、家族一緒で食べるのは夕飯ぐらいだ

朝ごはんを食べたら、歯磨(はみが)きやら寝癖直(ねぐせなお)しやらやって家を出た

中学校まで自転車で４０分

歩きだと1時間以上はかかる

私は自転車をこぎながら考え事をしていた

この世界には神も悪魔も妖怪も存在する

まぁ、存在が分かったのはつい最近のことなのだが……

人外側からは「人間も妖怪の一種で、他の妖怪達を認知できないくらい低級なんだ」とか、なんとか

そんな私達がなぜ彼等(かれら)の存在に気が付いたのか、というと

なにやら人間の妖怪としての格が上がってきたらしいのだ

数百年の時を経(へ)て、人間の持つ力が強くなってきたらしい

ようやく進化し始めたってわけだ

昔も今も、神と悪魔は争っている

妖怪はその中立的な存在で、天変地異とかは彼等の仕業だとか……

実はこの情報って全部、日本政府のトップシークレットなんだけどね

一般人は知らないよ？

だって知ったら混乱するじゃんか

なぜ、私がこんな超重要機密(トップシークレット)を知っているかというと、私の父がナントカ省のナントカ大臣なので知ってます

家族に話しても良いのかよ、と思うだろうがこの情報は全部、私がお父さんのパソコンをハッキングして入手したものだ

父に非は無い

ちなみになんでそんな事をしたかというと、浮気調査とちょっとの好奇心と趣味で、だ

私の座右の銘は“知識こそ最大の武器”である

私の記憶能力（知識は別として）はある程度、興味のあるものにしか働かないらしい

「……超能力……ね……」

思わず私は呟（つぶや）く

父によると、もともと力が濃い（強い）人には超能力が備（そな）わっているんだとか

それが妖怪としての人間の能力であり、その能力は人によって違うから一番の長所なんだとか

その超能力を持ってる人がこれからだんだんと増えていくのだ

いつしか、超能力を持っていることがアタリマエになる日が来るかもしれない

ちなみに、超能力は生まれたときから持ってる人もいるし、ある日突然能力が開花するかもしれない

みんなは、超能力に憧(あこが)れるかもしれないけど、超能力なんて持たない方が良いんだ

だって、その能力が危険なものだったら日本政府のソレ専用の組織に抹殺されるらしいから

だから、超能力なんて持たない方が良いんだ

絶対に、ね

「だぁぁぁぁぁぁぁぁ！今日も疲れたぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

私は大声で叫ぶ

大丈夫だ、周りに人がいない事は確認済みである

ココは自宅の裏山で、うちが所有しているらしい山

名前は知らないけど、私は毎日学校が終わったら直行でこの山の頂上にきて景色を眺める

日課と言っても言いぐらい毎日来てる

まぁ、雨降ってたり風強い日には来ないさ

さて……そろそろ帰ろうかな

もう7時半だからな……早く行かねば夕飯に遅れてしまう

ちなみに、今は真夏でまだ明るい

が、この山は登りに1時間、降(くだ)りに10分というなんとも可笑(おか)しな山だ

この頂上から下まで一直線に倒れている大木があって、そこを滑(すべ)ると10分程度で着く

私は今日もそこを滑って行った

滑り始めてから5分くらい経過した

ドウゥンッ　　ドウゥゥゥン

地響(じひび)きのような音がどこからか聞こえてきた

私は足を止めて辺りを見回す

「アレ？……まぁ、いっか」

結果、何もなかったのだ……気のせいかとも、思いつつあったので
また滑り出そうとすると

ドウゥン　　ドウゥゥゥンッ

「もう！なんなのさぁ！！」

私は大声を出してイライラを発散させる

また周囲を見渡(みわた)してみるが、音の発信源となろうものは見当(みあ)たらない

滑り出すと鳴って、止(と)まると止(や)む

って、ことは……

滑りながら見りゃいいんじゃね？

我ながら名案を思いつき、早速私は滑りながら辺りを見渡す……

慣(な)れてなかったら絶対にやらないよ、こんな危ないこと

ドゥゥゥンッ　　ドゥゥゥンッ

キタッ！さっきより小さいけど……遠くに行ったって事なのかな

もう、いいよ

面倒だからこのまま、無視して家帰ろう

私は辺りを見渡すことを止め、滑ることに専念することにした

その瞬間

ドンッ！！

私は驚いて足を止める

最初よりもずっと大きい音がしたのだ

「なんなのよ……遠くに行ったんじゃないの！？……もう、なんなの……」

私は怖くなって耳を両手で塞(ふさ)いで蹲(うずくま)る

ドウン！　ドウン！　ドウンッ！

この体勢だからだろうか、気付いてしまったのだ

この音は……ずっと私の中から鳴っていたのだ

「なんだぁ……私の中から鳴ってたんだぁ……ビックリしたぁ……」

ホッとする

正体が分からないものより、正体が分かった方がずっと良い

いや、しかし、改(あらた)めて考えると不気味だよね

「心音……にしちゃぁデカイよね……」

私は立ち上がり右手を心臓あたりに当てる

私の心臓は通常通り動いていた

正体が、知りたい

知らなければ、いけない

私は、絶対に……知ってみせる

何故(なぜ)か、そう思った

その時……声が聞こえた

――ナラ、オシエテアゲル！――

次の瞬間、私の目の前が暗闇に蔽(おおわ)われた

日常が壊れた日～壱～（後書き）

主人公のフルネームが出てきてないという失態

ちょこっと紹介（今回の登場人物）

緑河（みどりかわ）　恋（れん）…主人公

緑河　愛（あい）…恋の母親

日常が壊れた日～弐～（前書き）

途中からシリアスが一転してるような…

ま、いっか

日常が壊れた日〜弐〜

なに！？　なんなのコレ！？？

目の前が真っ暗！

それにさっき聞こえた声は何！？

随分（ずいぶん）と幼い子供の声だったような気もするけど、私の周（まわ）りには誰もいなかったし……

もしや……幽霊！？

なに！？　私ってば幽霊に憑依されてんの！？？

っていうかこの暗闇出たいよ！

――　イヤ？　ココキライ？　――

あの幼い子供の声が暗闇に響く

あ…いや、キライって訳じゃないけど……むしろ、気が安らぐような感じなんだけど

って、なんで私普通に対応してんの！？

――　ヨカッタ！　――

あ～……メッチャ喜んでる声だぁ

うんうん、そんな声聞くとコッチも嬉しくなるよぉ

……なんでだろうな、全然怖くない

客観的に見れば発狂しても可笑(おか)しくないと思うんだけど……

まるで、もう1人の自分と会話してるような……そんな感じがする

そう考えていると、相手の子はこんなことを言ってきた

――　ウン、ソダヨ　――

‘ソダヨ’ってねぇ……

君けっこう、軽いねぇ

……え？　ちょっと

マジでもう一人の自分なの？

――　ウン　――

本当に？

ホントにマジで！？

――　ホントダッテバ　――

くどいようだけど……ホントに？

――　プンッ　――

あ～……今の音ってもしかして、拗(す)ねてる？

本当の子供みたい

もしかして、これって私が悪いのかな？

とりあえず謝ろう

うーんと、ゴメンね？

――　プンッ　――

ホラ、拗ねないで

機嫌(きげん)なおして？

と、優しく言ってみた

すると案の定、こう返ってきた

――　シンジテクレタ？　ホントニシンジテクレタ？　――――

うん、信じるよ

君はもう一人の私なんでしょ？

なんでか知らないけど、そうだっていう確信があるんだ

あるいは直感……かな？

私の直感は結構アタルんだよ

……それにしてはなんで言語がカタコトなんだろう？

――――　ン～……ナントナク？　――――

なんとなく？

あ～……あるよね、そういうの

なんとなくあれやりたい、これやりたいって

そういえば、君の名前は？

というか、名前あるの？

――‘レン’ダヨ　ボクノナマエハ‘レン’　――

レン……ねぇ

もう一人の私だもんね、名前一緒かぁ……

私がそう思っていると、レンは唐突にこんなことを言った

――　スッカリワスレテタコトガアル　――

いきなりどうしたのさ

というか、何を忘れてたの？

――　サッキノ‘オト’ノコト　――

あ……

私も忘れてたよ

それで、さっきの音の正体って何？

――　ボクガウマレタオト　――

へ～……そうなんだぁ

……

……

……

……は？

ウマレタ？生まれた産まれたうまれた……

え？　なに？　どういうこと？？？

全(まった)く分かんないよ！？

――　ボクハサッキウマレタ　モウヒトリノ‘レン’ナノ　――

そう、ですか……

いや、てか、もう何がなんだか分かんないな

とりあえずツッコミどころ満載(まんさい)だけど無視するから

レンはなんでウマレタの？

――　‘恋(れん)’ノキモチガタクサンニナッタカラ！　――

私の気持ちがたくさんになったからももう1人の私がウマレタの？

スミマセン、分かりません

もちょっと詳しくお願いします

――‘恋’ノ“知りたい”ッテキモチガイッパイニナッタカラ
ボクガウマレタノ　――

さいでっか

……ん？

レンは私の“知りたい”って気持ちからウマレタもう一人の私なわけで…

それって簡単に言うと……二重人格ってこと？

――　チガウチガウ　――

え、違うの？

どうして？

――　ボクハ‘恋（れん）’ト‘オナジヒト’ダケド‘チガウヒト’ナノ――

それって二重人格とどう違うの？

――　チガウモノハトガウノ　――

ごめん、わかんないや

私がそう謝ると、レンは優しくこう言った

――　ワカンナクテ　イイノ　――

――　ソレガ“知りたい”ッテキモチニナッテ　ボクノ‘エネルギー’ニナルカラ――

え、エネルギー！？

気持ちがエネルギーに！？

太陽光発電もビックリな変換だね！？

ちょっと信じられないけど……

それにしても、エネルギーが必要って、何かするの？

――‘恋（れん）’ガ“知りたい”ッテオモッタコトヲ‘恋（れん）’ニオシエルノ――

教えるの？

私が知りたいことを教えてくれるの？

すごく私に優しいわね

それにしても、どうして？

――　ソレガボクノ　ユイイツノ“存在意義”ダカラ　――

“存在意義”……？

私が知らないことを私に教えることだけが貴方(あなた)の“存在意義”なの？

――　ソウダヨ　――

それって……

…哀(かな)しくないの？

――　ドウシテ？　――

“存在意義”が一つだけで哀(かな)しくないの？

もし、私の“存在意義”が一つだけだったら……

私は……哀しいわ

‘レン’は哀しくないの？

――　ワカンナイ　‘哀しい’ガ　ワカンナイ　――

えっ！？　分かんない！？

――　デモ　‘恋’ガ‘哀しい’ナラ　ボクモ‘哀しい’ヨ　――

そっか……私達は同じだもんね

そうだ！

私が‘レン’にもう一つ、存在意義をあげるよ

――　ナニナニ？　――

私と、‘恋’と……ずっと一緒にいて頂戴？

学校じゃ、あんま気軽に話せる人いないから寂しいんだよね

それに、私は“孤独”　が一番ツライことだと知っているから

――　ワカッタ　‘恋（れん）’ヲモウ　ヒトリニシナイカラ　――

――　ダカラ　――

だから？

……どうしたの？

‘レン’？

――　ナカナイデ　――

“泣かないで”？

どうして？

私は泣いてなんかいないよ？

――　ボクハオナジ‘恋（れん）’ダカラ　ワカルヨ　――

何を？

――‘恋（れん）’ハイマ　ナイテルデショ？　――

どうしてそんな事を言うの？

……レン、私は泣いてなんかいないよ？

――　モウサビシクナイカラ　コドクジャナイカラ　ナカナイデ？
――

……

……

……意地、強いね

寂しいから泣いてるんじゃないよ

孤独だから泣いてるんじゃないよ

コレは嬉泣(うれしな)きというモノさ！

――　ヒラキナオッタネ　――

開き直って何が悪い！

そのまま、私達は他愛も無い会話を続けた

こうして、‘私’は……‘れん’は二人になった

そして、孤独でもなくなった

日常が壊れた日～弐～（後書き）

もう少しこのような説明みたいな話が続きます

読んでくださってありがとうございます

日常が壊れた日〜参〜

……ん……？……

そういえば……

ねぇ、レンこの暗闇って何？

そして、どうやって出るの？

――　コレハネェ　ボクノ‘仮(かり)の体’ダヨ　――

‘仮の体’？

何ソレ、この真っ暗なのがレンの体なの？

って、レンの体って私じゃないの？

――‘超能力’トシテ‘具現化’スルタメノ‘仮の体’ダヨ――

――ダカラ‘本当の体’は‘恋’ナンダ――

……今、衝撃発言が聞こえた気がする……

え、何？　まさかとは思うけど……

レンって超能力なの！？

――ウン　ソダヨ――

軽っ！？

てか、マジで超能力！？

え！？　ヤバくない！？

こ、こここここ殺されたりするんじゃないの！？

あの資料にいいいいいいいいいい

――　ウン　トリアエズオチツコーカ　――

……はい

スーーハーーースーーハーー

おし、深呼吸完了！

えっと、再度言いますけれど、なんか政府の方に殺されたりは……

――　バレナキャダイジョブデショ　――

わお、アバウト！

え、でも結構、私の命に関わることなんですが……

きっと私が死ぬとあなたも死ぬと思うのですが……

――　ジャア　ボクヲツカエバイイヨ　――

……え？

今、なんと、仰(おっしゃ)いましたか？

――　ボクヲツカッテ　ソノ‘セイフ’ヲ‘知(し)’レバイイヨ　――

そんなこと出来るの？

そんなこと……どうやって？

――　ネガウダケダヨ　――

――‘恋(れん)’ガネガエバ　シゼントボクハ‘セイフ’ヲ‘知る’ヨ

――

――　ツヨクネガエバ　ネガウホド　ハッキリト‘知’レルヨ　――

んー……と、こうかな？

私は政府の特殊能力専門の組織を知りたいと願った

強く、強く

絶対に私は知らなければならない、と思い込む

その瞬間、映像が目に映る

薄暗い部屋

椅子（イス）に座る、偉（えら）そうな中年の男

その男と話している１３～１５歳ぐらいの身長の少年

まさか、この部屋が……その組織の……！？

――‘恋(れん)’　コノヘヤデイイ？　――

うん、いいと思う

すると、少年が此方(コチラ)へと振り返る

バッチリ★ミ

と、目が合ってしまった

おや、結構童顔じゃないかい？　身長のわりには

えーと……私達って相手に見えてるのかな？　レン君や

――　ウーン　ワカンナイケド　――

――　レンシュウスレバ　ミエナクナルコト　モデキナクモ　ナインジャナイカナ？　――

……つまり……？

……今は？

――　ミエテルネ　――

すみませんが……今も私は少年と目が合っているのですが……

うん、バッチリと……そりゃぁもうバッチリと見つめ合っているんですが……

このままいくと生命の危機的な？

――　ソレジャ　カエロウカ　――

……え？

そう思った瞬間にはあの森にいた

「ありゃ？　まだ明るいじゃん」

――　ボクガウマレテ　‘恋（れん）’トハナシテタノハ　ホボイッシュン
ノコトダヨ　――

へ～……そうなんだ

私には何十分にも感じられたんだけど……

ねぇ、レン……超能力って、なんなの？　レンは超能力なんでしょ？

――‘超能力’ハ‘素質’ノアルヒトガ‘何か’ヲツヨクネガウ
コトデ‘具現化’スルモノ　――

素質、ねぇ……その素質が私にはあったってことなのねぇ……

素質って誰にもあるものなの？

――アルヒトトナイヒトトイルケド　アルヒトハ‘何か’ヲツヨクネガワナイカラ

ホトンドガ‘具現化’シナイノ　――

そ、そうなんだ……

えっとさぁ、その‘何か’って……なに？

――‘何か’ハ‘何か’ダヨ　‘恋（れん）’ノバアイハ‘知りたい’ッテキモチダヨ　――

あぁ～……なるほど、たしかに私、あの時‘知りたい’って思ったからね

でも、音がなってたのはその前からだったよ？　矛盾してない？

――‘恋（レン）’ノ‘知りたい’ッテキモチハ　ツネヒゴロカラタマッテタノ　――

――ソレガゲンカイニチカクナッテ‘ボク’ト‘恋(れん)’ガ‘解離’シテキテ‘あの音’ガナッタノ――

――サイゴノダメオシミタイニ‘恋(れん)’ガツヨクオモッタカラ ボクハイガイトハヤク

ウマレタノ――

スミマセン、全ッ然理解できていないです

途中から聞き流してました

そりゃあもう、右から左に受け流してましたよ

――ソレハ‘恋(れん)’ガツヨク‘知’ロウトシナイカラデ――

難しいことは嫌いなんです！

そんなの分かりたくも知りたくもありませんから！

だいたいさぁ、レンが生まれて、もう1人の私ができた～　で完結していいじゃん！

――　ソレナラキキカエサナイデヨ　――

……むぅぅぅ

あれ？

何か、忘れて、いないか……？

ぐぅぅぅぅるるるる

盛大に私のおなかがうめき声をあげる

――　ソウイエバ　ユウゴハン　イカナクテイイノ？　――

それだぁぁぁぁぁ！！！

私は駆(か)ける

家まで全速力で

沈黙の食卓

ハァッ　　ハァッ　　ハァッ

息を切らして、なんとか私は家へと到着した

「おやぁ、恋お嬢様（じょうさま）じゃぁ、ありませんか。どうなさったんですか？

そんなに息を切らせて…」

この人はうちで住み込みの使用人をやっている佐藤さんだ……

ちなみに、見た目年齢５０歳越えの中年おばさ…ごほん、おばちゃんだが本人は永遠の１７歳だと言っている

「あぁ、ちょっとね……。それより佐藤さん、今日の夕食ってなぁに？」

「うふふ、今晩はお嬢様の好きなそうめんでございますよ。

そういえば、旦那様が夕食の際に大事な話があると仰っていましたよ」

ヤッタ！　そうめんだ！

……って、大事な話って何よ

もしかして私が超能力者だってバレたのかしら……？

まぁ、とりあえずリビングに行こうっと

「さて、佐藤君から聞いているようだが、私から大事な話がある…
…臆(おく)さず聞いてくれ」

みんなが夕食を食べ終わった頃、お父さんがマジメな顔をして言ってきた

普段はヘラヘラと笑ってるお父さんだが、こんなにマジメな顔を見たことがない

それだけ重要な話なんだろう…

「実はな、父さん……」

え、そこで区切る！？　間を置いちゃう！？

早く言ってちょうだい！

途中で区切ると逆に気になるから！！

「実はな、父さん……大臣、クビになっちゃった♪」

……

……

……

……

……

……え？

大臣って辞任じゃなくてクビなの！？　←ツッコミどころ違うよ！

ｂｙレン

「あなた、これからどうするの？」

冷静なお母さんがお父さんに言うが、お父さんはまたヘラヘラしだした

「まぁ～、大丈夫だろ。貯金はまだあるし？」

おいおい……こんな豪邸に住んでてお手伝いさんも雇ってるんだよ？

貯金はいっぱいないともたないんじゃないかな？

そんな私の意志を汲み取ってか、お母さんがまたお父さんに尋ねた

「でもあなた、貯金ってどのくらい残ってるのかしら？」

「う～ん、たしか……一千万ぐらいじゃなかったかな？」

い、一千万！？　お父さんったらあれだけお酒にお金使っといて、一千万も貯金してたの！？

まぁ、これならお父さんがお酒を買わなかったらしばらく大丈夫だろう

これで、お父さんがどっかで就職できるまで、なるべく節約生活かな？

そんなことを考えていると、佐藤さんがトンデモ発言をした

「一千万……食費水道費いろいろ考えると半年ぐらいで無くなりますね」

おぅい！　一千万を半年ぃ！？

どんだけ金かかってるんだよ！

どうすんのよ！　お父さん！！

「半年！？は、早いな……しばらく酒は自粛しよう。
それにしても……父さん、これを機に隠居しようと思うんだが……」

い、隠居！？　何言ってんのよお父さん！

まだ５０歳半ばでしょ！？

「あなた、それはいくらなんでも早すぎじゃない？

あなたが稼がなかったら、家の生計はどうやって立てるのよ」

そうよお母さん！　もっと言ってやれ！

「お父さん、私も同感だわ」

「旦那様、わたくしも奥様とお嬢様と同じ考えでございます」

おぉ！　ついには佐藤さんまで味方に付いたか

「うぅん、しかしな…」

お父さんもまだ粘るか

すると、佐藤さんがまた口を開いた

「旦那様ほど優秀な御方（おかた）であれば、これほどまでに欲しい人材はございません。

よろしければ、わたくしの実家のグループに話をつけてみましょうか？」

おぉ！　ナイス佐藤さん

というか、佐藤さんの実家すごいな……佐藤さんも気品があって立派だし

「ありがとう、桃子（とうこ）君。よろしく頼むよ」

お父さんがそう言って佐藤さんに握手を求めた

佐藤さんもそれに答える

あ、ちなみに“桃子”っていうのは佐藤さんの下の名前ね

お母さんは満足して自室へと戻っていった

さて、私も戻ろうかな

最後に佐藤さんにお礼を言おうとして佐藤さんに目を向けると、なんと……

いまだにお父さんと握手しているではないか！

え？　ちょっと2人ともそういう関係！？

不倫！？　　お父さんったら佐藤さんと不倫！？

お母さんはお父さんのために実家に頭下げてお金を貸してもらったこともあるんだよ？

そんなお母さんを裏切って佐藤さんを選ぶなら、私はお父さんを許(ユル)さないよ？

別に佐藤さんが悪いって言ってるんじゃないよ？

ただね、佐藤さんも自分の立場ってヤツをしっかりと理解してこの職に就(つ)いたんだよね？

それなら、罰せられるっていう覚悟も充分なんだよね？

「……と、桃子君？そ、その……そろそろ手を離してくれないか

な？

れ、れれ恋が……凄(すご)い目で、睨(にら)んで、いるんだが……」

おぉっと、自分でもわかるぐらいお父さん達を見つめていたらしい…

あくまでも“見つめていた”だ

睨んでなんかいないよ？　ただ“見つめていた”だけだよ？

ありゃ、お父さんの顔色が真っ青(まっさお)だよ？

どうしたのかな…

さて、私も自分の部屋に戻ろうか♪

自室にて

私は今、自室のベットに紙とペンを持って寝転んでいる

今日の出来事をわかり安くまとめているのだ

「えっと……超能力者とは素質のある人間が‘何か’を強く願うとそれにみあった能力を発現する、でいいのよね。レン？」

私がそう呟くと可愛らしい子供の声が頭の中に響く

――　ウン　ソウダヨ　デモネ　ネガウ‘何か’ハ　ソノヒトニアッタモノジャナイト　ノウリョクハハツゲンシナイカラ　――

合ったもの……？

――　ボクタチデイエバ‘知識欲’ッテトコロカナ？　――

ふーん……私は知識を欲(ほっ)した＝知ることを願った　ってことね

それにしても、私は超能力の素質があったんだね

以外だわぁ

それじゃあ次は、っと……

「私の持っている能力は“知りたい知識を知ることが出来る”でいいのね？」

――ウン――

「その方法は“私が知りたいと願う”で、その願いがエネルギーとなって知ることができる」

――ウン“願いがエネルギーになる”カラ“願い”ノツヨサガヨワイト スコシシカ“知る”コトガデキナインダ――

なるほどねぇ

といっても、願いの強さなんて曖昧にしかわからないよ

「私があの、政府の暗殺部隊を知りたいって思ったのは強かったのかな？」

――　ツヨサデイッタラ　ツヨカッタケド　ハジメテダカラ　ウマクイカナカッタンダネ　――

ということは、慣れればうまく使えるってことか

もしや、これは政府にバレなければ金儲けに使えるのでは……？

たしか、数年前にドラマで“敵国から機密情報を持ち出すべく入り込んだ王女”見たいな内容のものがあった

私はこれ場合、わざわざ敵国に危険を冒していかなくとも情報を得ることができるのだ

この能力って、使い勝手がいいのね

貯金のことで心配になって、アルバイトでもやろうかと思っていたところだ

世間の中ではまだ中学生の私を雇ってくれるところなんてないだろ

う

父親のコネを使えば別だけれどね

どうしようか

…

……

……

……

……

……

……迷っててもしょうがないね

後で考えようっと

そうだ、この際いろんなことをメモしておこう

・この世界には神と悪魔と妖怪の３種類が存在している

・この中では妖怪が一番種類が多くて、人間も妖怪の一種

・神と悪魔は争い合っていて、妖怪は中立の立場にいる

・神は神力を、悪魔は魔力を持っていて、神寄りの妖怪は霊力、悪魔寄りの妖怪は妖力を持っている

ふと、私は手を止める

「ねぇ、レン。私達人間も妖怪なんだから霊力か妖力を持ってるはずよね。私が持ってるのって、霊力なの？　それとも妖力？」

――“妖力”ト“霊力”ヲ　スコシズツダヨ　――

少しずつ？

私はどっちも持ってるの？

――　ウン　“霊力”ト“妖力”ノ　チガイハ　“他に害を成す”カ“他に害を成さない、他の助けになる”カデ　キマルンダ　――

でも、それだったら害を成さない“霊力”を持ってるんじゃないの？

――　“知った”チシキヲツカッテ　“脅迫”トカヲヤレバ　“害を成す”トミナサレルンダヨ　――

それで、どちらの可能性もあるから両方、少しずつあるってわけね

まぁ、霊力妖力を持ってたって金になるわけじゃないし

ふあぁぁぁ、とあくびが出たので時計を見てみると9時半を過ぎたところだった

「今日はなんだか疲れたなぁ」

――　ノウリョクヲツカウト　タイリョクモツカウカラネ　ヤスンダホウガイイヨ　――

レンもこう言ってるんだから、もうお風呂に入って寝よう

私はすぐに準備を済ませて、風呂場へ向かった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3885t/

百目鬼少女の見る世界

2011年10月8日03時53分発行